

学びほぐしと威光模倣による教員養成系学生の学習の可能性

羽野ゆつ子 (大阪成蹊大学)

キーワード：威光模倣, 学びほぐし, 教員養成

問題と目的

教員養成の課題として、教職への準備性を高めることが挙げられる。「熟練した学習者」から「新米の教師」への困難な移行、創造的問題解決や領域横断的な学びといった授業の質的転換など、学生は、教職に就く際、被教育経験を越えた課題に直面する。教員養成系学生の質的変容を教員養成課程の枠内でどのように実現できるのか。その方法として、学生の学びほぐし (アンラーニング) と、熟達教師の威光模倣による「わざ」授業実践力の継承 (井藤他, 2016) が考えられる。本研究では、創造的な教育実践を展開する熟達教師によるワークショップ (以下 WS) の体験が、教員養成系学生の学びほぐしの機会になるのか、その体験が威光対象との出会いとなり威光模倣による学習の可能性を開くのかを探索的に検討する。

方 法

対象者 私立大学教員養成系学生 38 名 (2 年次)

時期 2019 年 10 月～11 月

手続き WS (90 分×2 コマ) を体験し、翌週、自由記述のアンケートを行った。①ワークショップの振り返り、②2 名の講師の WS を再度受けてみたいか (受けてみたい、どちらとも言えない、受けたくない)、その理由を質問した。

WS 講師 私立高校で、創意工夫のもと「プロジェクト」や領域横断の授業など 21 世紀型の教育を行っている 2 名。U 理論などに学び、認識枠組みを手放し (アンラーニング)、「自分である」ことから生まれる学びに注目し、アクティブラーニング (主体的、対話的で深い学び) に生徒を誘うために、互いの話を〈評価せずに聴く〉場づくりから実践を行っている。

WS の内容 ①互いに〈聴く〉ことで安心感をもって学ぶ場になることを体験する、②互いに助け合いながら、自分自身の感情・ニーズに気づく、③人を援助するためにまずは自分が自分であっていいという健全な自信を感じることを意図として、①互いに〈聴く〉こと、②NVC (Nonviolent communication) のワーク、③マインドフルネス、④シェアリングを行った。

結果と考察

学びほぐし 聴くことと話すことについて、自分

の習慣化した考えや行為を振り返る記述をした学生は 38 名中 36 名 (94.7%) だった。「聞いてもらえる安心感によって話せることに気づいた」「ただ聴くことの意味に気づき、普段も実践するようになった」「話すことで自分と向き合うことができる」と気づいた」といった回答が見られた。本 WS が学生にとってコミュニケーションの学びほぐしの機会になったと言える。

自己 自己の変化の記述を WS の意図に照らし、①オープンマインド (自分のことを話せた、評価せずに聴こうとした)、②内省 (自分の感情やニーズに気づいた)、③在り方 (自分は自分であっていいと気づいた)、④その他に分類した。

Table 1 自己の変化 (%)

① オープンマインド	23 (60.5%)
② 内省	13 (34.2%)
③ 在り方	1 (2.6%)
④ 自己に関する記述なし	1 (2.6%)

60%の学生が習慣化した行動を保留してコミュニケーションを行い (①)、34%の学生がその過程で内省をした (②)。在り方に言及した学生は、「一人で頭の中で人生について考えてきた」が、「WS での対話を通して多種多様な道があって、皆、軌道修正、試行錯誤しながら進む。自分の考える道も、間違っているわけでも正解でもないが、進んでいけばいいと思えた」と記述した。

威光模倣 本講師による WS を再び受けたいかと、その理由を尋ねた結果を示す。

Table 2 WS の継続性 (%)

受けたい	35 (92.1%)
どちらとも言えない	3 (7.9%)
受けたくない	0 (0.0%)

Table 3 WS を受けたい理由 (複数回答) (%)

この講師だから	15 (42.9%)
自分に気づく WS だから	16 (45.7%)
WS が楽しい、面白い、よい	16 (45.7%)

WS の継続希望は高く、理由に講師の存在を挙げた者も多く、「場づくりの方法」「学校での実践」を学びたいと回答した学生もいた (4 名)。威光模倣による教員養成の可能性が示唆された。

引用文献

井藤元他 (2016). 「威光模倣」をつうじた教員養成の可能性 東京理科大学紀要. 教職篇 (48), 15-33.